

8.

「弘前ねぶた」と岩木山北山麓「鬼伝説の里」

「鬼沢・鬼神社」・「十腰内・巖鬼神社」

2000. 8. 3-4 onisawaprint.htm by M. Nakanishi

【鬼沢のねぶた】



【岩木山 赤倉口】



8 月東北は祭の季節。

弘前ねぶたと秋田・大湯のストーンサークルに接したくて、8 月 3. 4 日の休みを利用して日朝早く東北へ飛出した。今回津軽 walking の目的は古代の製鉄地帯であり、ねぶたの発祥の地でもある岩木山山麓弘前・五所川原のねぶたを見て、古代製鉄のエネルギーをねぶたに感じることを目的。

赤坂先生編集の「東北学 2」に鬼沢・鬼神社の祭礼のきれいな写真が紹介されているのを発見。ねぶたを見て、岩木山北山麓の古代津軽の大製鉄地帯に伝わる鬼伝説と関係する鬼神社・巖鬼神社を訪ねる予定を組んで出かけた。

2000. 8. 3, M. Nakanishi 訪問記

【 内 容 】

1. 「弘前ねぶた」
2. 「鬼沢のねぶた」出陣へ
3. 岩木山の鬼伝説
4. 鬼神社 巖鬼山神社を訪ねて

8.1. 弘前ねぶた



8月3日夕方 盛岡-弘前の高速バスで弘前に到着。駅には「弘前ねぶた」が飾られ、観光客を迎えてくれるが、もっと混雑を想像していたが、予想外。

むしろ青森「ねぶた」観光列車が出たり、駅員はそのPRに忙しい。もっとも、五所川原・弘前とも「ねぶた」で宿をとるのはむづかしい。やっと弘前公園の近所の街中の旅館に宿が取れた。

五所川原の「ねぶた」は高さのあるおおきな「立ちねぶた」として有名でひそかに見ることに期待していたが、今日は前夜祭で火は入るものの運行なしとのこと。 ゆっくり弘前のねぶたを見ることにした。



午後7時夕闇せまる弘前城のお堀端から運行がはじまった。例の「ねぶた」の囃子とともに扇型のねぶたが一斉に動き出した。

巨大な太鼓の上にも打ち手がまたがり、太鼓の上下から打ちたたき凄い音とリズムをだしている。

津軽じょっぱり太鼓というそうだが、この強烈な音とリズムを伴走に中国三国志等の絵が描かれた「ねぶた」が多次から次と繰り出される。

その数 50 を越える連。ねぶたの総数優に 100 を越える。



弘前ねぶた

弘前の「ねぶた」は扇型で、一つの連では、小さなねぶたを先頭に大小幾つものねぶたを出し、一番最後に大きなねぶたと大きな太鼓とその打ち手を先頭にした囃子方が続く。

それらのねぶたの大きさに応じて その引き手・担ぎ手も小さな子供達から大人まで、いろんな年齢の人が一つの連を組み行進する。

このねぶたの共同運行に参加することを「出陣」という。街や集落のあちこちに「出陣」の登りがひるがえり、それぞれの街が、「ねぶた」を出していることをほこっている。

日が落ち暗くなると引き手や周りの建物の影が消え、囃子の主役である太鼓とねぶただけが浮かび上がり、太鼓を中心とした囃子に乗って、時々「トウリヤートリヤ」の声が掛けられる。また、表には三国志等を題材にしたねぶた絵が描かれ、裏面には美人画が描かれる。このコントラストもおもしろい。この表・裏面の絵を見せる為、この扇型の部分を引き手が回転させると見物している人達からパチパ



と拍手がおきる。青森ねぶたのあの「ハネコ」はいないが、太鼓のリズムは強烈だし、都会では消えた津軽の街のエネルギーを感じると同時に実に美しく楽しい祭である。また、弘前の街の性格から来るのか良く判らないが、殆どの連が地域・地区の連で、他の観光化した祭に見られる企業の連とその PR の連は少なく、絵もほぼ伝統のねぶた絵にまとめられており、手作り・地域の人みんなで楽しんでいるといった風が色濃く守られている。例えば幼稚園のグループが沢山出陣

していたが、小さなねぶたに子供達の今のキャラクタがまじっているが、ほほえましく全く違和感がない。



次から次と連がくりだし、横丁を歩くと運行に参加するねぶたが順番待ちであふれている。少し離れて町をみると祭りのさなかであるが、どこも普通にいつもとかわらずと言った風。街も人も特別な風ではなく、みんな楽しみで仕事を終え、ねぶたに参加するため、三々五々集まっている。そうではないと1-7日まで7日間もつづかない。

また この祭はどこかの神社の祭礼といったものでなく、みんなで夏を楽しんでいる。後で知ったのであるが、街の中心部だけでなく近郷の集落もみなそれらの集落で準備し、この弘前の街の中心の運行に参加すると言う。

運行の丁度真中あたりで、明日出かける「鬼沢」集落の連が「鬼伝説の里・ねぶた」として登場。びっくりした。地図で言うともう弘前の外れ、街から岩木山の麓を鰯ヶ沢の方へ車で約30分のはず。

随分遠く離れているのに。

後でわかったのだが、鬼沢の里は今も「鬼」を大事にするおおきな集落であった。

観光化せず、周りの集落も含め、老いも若者もそして子供たちもみんな、年に一回、弘前の街の中心にあつまって楽しむ手作りの祭 それが「弘前ねぶた」。

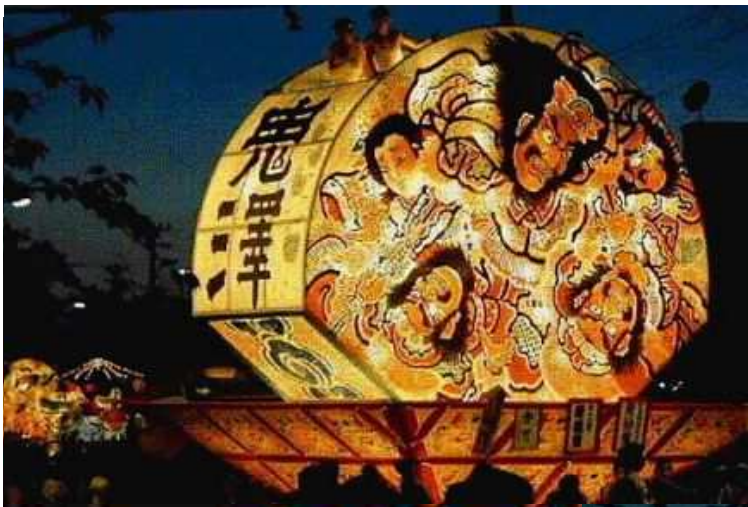
都会では消え去った地域のつながりを強く感じました。

8.2. 「鬼沢ねぶた」出 陣



丁度運行の真中あたり、「鬼伝説の里 鬼沢」と浮かびあからせねぶたを先頭に「鬼沢ねぶた」の連がやって来た。大きな連である。

私の頭の中では、何の根拠もなく、津軽のエネルギーを「ねぶた」と「たたら・鬼伝説等古代からの文化」とをだぶらせて考えていたが、ストレートに「鬼沢の集落が鬼伝説の里として」ねぶたの運行に加わっている事に意外で少なからず感動した。



鬼沢は弘前の街から西へ鬼が住むと昔から伝えられる岩木山北山麓の赤倉山麓を鰯ヶ沢へ続く一本道を車で約 30 分。古代の集落遺跡や古代の大製鉄地帯の端にあり、次の鬼伝説があり、さらに 4,5 扣進むと弘前市の端「十腰内」。

この十腰内から鰯ヶ沢にかけては既に紹介した古代たたら遺跡が残る古代たたら中心地であり、古代遺跡ばかりでなく、有名な鬼伝説「鬼太夫伝説」や地名に古代たたら製鉄の基地としての痕跡を色濃く残している。

8.3. 岩木山の「鬼伝説」

【岩木山北山麓赤倉側 古代製鉄地帯の鬼伝説】

1. 鬼沢の「鬼伝説」

**** 津軽 岩木山麓 鬼沢に伝わる「鬼伝説」 ****

青森県 弘前市 鬼沢

昔々このあたりはやせた荒地で、作物の実りはきわめて悪かった。

そこへ、岩木山の赤倉から下りてきたという鬼が現れ、せっせとこの荒地を耕し始めた。

村人達は、これを見て、ただの鬼ではないと思い、開墾の困難と農業用水の必要を 鬼に訴えた。すると鬼は、それでは力を貸そうと言ったきり、姿を消してしまった。

翌朝になって村人たちが行ってみると荒地には、一筋の水の流れが勢いよくほとばしっているではないか。

村人たちは、さっそくその水を田に引き、以後、その水は干ばつの時も決して枯れることはなかったという。

村人たちは、非常に喜んで、鬼に感謝するため、神社を建立して「鬼神社」と名づけ、村の名前も「鬼沢」としたという

節分に豆をまかないという

2. 鬼神太夫伝説

***** 岩木山北山麓の「鬼太夫」伝説 *****

鱒ヶ沢町 湯舟 湯舟神社 弘前市 十腰内 巖鬼神社

昔 鬼神太夫(赤倉山の鬼とする話もあり)と呼ぶ剛力の刀鍛冶がいました。桂山の刀鍛冶長者の娘を愛して娘をくれるようにと申し込んだ。困った長者は一策を案じ、一晚の内に拾腰(本)の刀を鍛えたら娘をやると約束した。

すると、鬼神太夫は一晚の内に、全部刀を鍛えて持ってきたが、長者が一本盗んで 鳴沢川 に捨ててしまった。

それで、鬼太夫は刀が一本足りず、娘を貰えずあきらめて、「十腰無い 十腰無い」とつぶやきながら、さびしく去っていった。

それで、それ以後この地を「十腰無い」がなまって「十腰内」というようになった。 また、残った九本の刀は巖鬼神社に納められた。

その後、鬼長者の妹娘と結婚した鬼神太夫の弟が、ある日のこと鍛冶場の片隅に残っていた玉鋼

明け、その玉鋼を氏神として八幡様に祭った。

は今もこの玉鋼だという。

)をやり、分家させた。

が湯舟村 金敷村の起こりとなった。

いた所を「浮太刀」と言うようになった。今の「浮田」である。

なお、このような鬼太夫伝説はほかにも日本各地にあり、鍛冶屋などが、実在の名刀 工などに鬼神の名をつけた伝説を作り広げたとされている。

8.4. 赤倉山山麓に鬼神社・巖鬼山神社を訪ねて



岩木山北山麓のリンゴ畑



鬼沢・鬼神社



十腰内 巖鬼山神社



赤倉口近傍 岩木山

1. 十腰内 鬼の総元締 巖鬼山神社
2. 鬼伝説の里 鬼沢&鬼神社

8月4日の早朝 弘前から鱒ヶ沢まで、岩木山北山麓に広がる赤倉側のに残る鬼伝説を訪ねるため、バスターミナルへ行った。予想していたとは言え、「一番奥の巖鬼山神社のある十腰内を通る鱒ヶ沢行」次は2時間後。鬼沢までは、約1時間後にある」との返事。

まあ、「岩木山山裾 鱒ヶ沢への1本道。何本かバスがあるかも」の淡い望みはダメでした。「バスだと約1時間。タクシーで約30分。」の話をたよりにタクシーにする。

タクシーの運転手氏に「岩木山の赤倉の集落を通して 一番奥の十腰内の巖鬼山神社に行き、引き返して鬼沢の鬼神社でおろしてほしい」と目的を伝えると「まあ 物好きな」と笑いながら「それでも 1年に数組 同じように鬼伝説やたたら製鉄遺跡を訪ねて、この赤倉側から鱒ヶ沢まで案内する」と。

岩木山北山麓は古代から開けた土地。この地では、岩木山の峰の一つで昔から鬼が集団で住んでいるといわれる巖鬼山(赤倉山とも言う)がその急峻な山裾を津軽半島にむかって伸ばしている。

そして、昔からこの赤倉山側の山裾から巖鬼山を通して頂上への陰しい道が通じ、その入り口近傍の十腰内の山合の地に岩木山神社の元宮である巖鬼山神社がある。

岩木山神社のある百沢口が開かれるまではこの赤倉側の道が岩木山への本道で、古代より広く人々の信仰を集めている。

このあたり幾筋も伸びる沢筋からは古代から製鉄がおこなわれ、鉄滓や製鉄炉跡等が発見され、この地が古代津軽の一大製鉄地帯であることが判って来た。

その中で、十腰内から山裾の沢筋をすこし鱒ヶ沢の方に下った鱒ヶ沢町湯舟は十腰内や巖鬼山神社と共に、鬼神太夫の伝説の中心地である。

また数々の製鉄遺跡も発見されている。

鉄滓や羽口とともに100を越える製鉄炉や木炭炉の跡等が発見された空沢遺跡はここにある。

参 考 津軽岩木山北麓の古代津軽の大製鉄地帯と鬼伝説

う鬼伝説の里「鬼沢」は十腰内から3つほど集落を弘前の方へ戻ったところ。この鬼をまつる鬼神社は巖鬼神社を本社とする末社。

このように岩木山北山麓赤倉側の山合には、鬼伝説が広くつたわり、古代から渡来した産鉄の民が鉄の王国を築き、大和勢力と対峙する蝦夷の本拠地であったと推定されるが、まだ確たる証拠はない。

1. 十腰内 鬼の総元締 巖鬼山神社



弘前から街を出て、岩木川を渡り、岩木山山麓にさしかかるあたりからは、一面のリンゴ畑。リンゴの実をつけているもののまだ、青く熟した真っ赤な実になるには数ヶ月かかるだろう。

リンゴ畑の一本道を走るが、岩木山は霧の中で全くみえず。出発して 15 分ばかりすぎると岩木山の外周道路にでて、山壁が見えるほどに山が近くなる。赤倉の集落である。岩木山の輪郭が霧の中に薄っすらと見え、霧で埋まった幾筋もの谷筋・沢筋がみえ、いよいよ山の中に入ってきた。

赤倉から 10 分ほどさらに走り、鱒ヶ沢への道と別れ、巖鬼山神社への別れを山の中へと原生林の中に入っていくと谷筋の出口に巖鬼山神社が立っていた。



巖鬼山神社の中は鬱蒼とした谷間の森で、小さな社殿の横には千年を越える杉の巨大樹が天空にそびえ、古代から鬼伝説の世界をずっと眺めてきたに違いない。

本殿のすぐ西側の沢筋には、「龍神」がまつられている。深い樹木につつまれたこの沢筋からは一筋のきれいな水が流れおち、龍神とが重なり、産鉄の民が古くからこの谷筋でも、「製鉄をやっていたのでは?」と思えるような沢すじ。

おそらく境内の 2 本の杉の巨大樹はそれをじっと見てきたのでは・・・と想像を膨らましている。

誰もいない鬱蒼とした原生林の中にひっそりと「巖鬼山神社」がありました。
でも「鬼の総元締の神社にしては明るい」と感じました。



千年杉の巨木



原生林につつまれた本殿



千年杉と本殿



本殿そば龍神を祭る沢筋

巖鬼山神社の中は鬱蒼とした谷間の森で、小さな社殿の横には千年を越える杉の巨大樹が天空にそびえ、古代から鬼伝説の世界をずっと眺めてきたに違いない。

本殿のすぐ西側の沢筋には、「龍神」がまつられている。深い樹木につつまれたこの沢筋からは一筋のきれいな水が流れおち、龍神とが重なり、産鉄の民が古くからこの谷筋でも、「製鉄をやっていたのでは?」と思えるような沢すじ。おそらく境内の2本の杉の巨大樹はそれをじっと見てきたのでは・・・と想像を膨らましている。

誰もいない鬱蒼とした原生林の中にひっそりと「巖鬼山神社」がありました。
でも「鬼の総元締の神社にしては明るい」と感じました。

2000.8.4, M. Nakanishi 訪問記

2. 「鬼伝説の里」 鬼 沢 と 鬼 神 社

待たせたタクシーに乗って巖鬼山神社から約10数分。弘前の方へ引き返す。来るときに通った道から一筋北側のバス道を2,3の集落の家並をすぎると大きな明るい集落に入った。

山裾の村というより、大都会弘前のベッドタウンといった感じの前後を沢筋で区切られた明るい丘陵。それが鬼沢であった。もっと暗い山合の小さな集落をイメージしていたが、まったく異なる。これだけ大きければ、昨日の大きな鬼沢地区ねぶたの出陣もうなずける。

鬼伝説の鬼神社は、こんな街中の小さな森の中にひっそりありました。

「鬼が灌漑用に堰を築いて水不足をすくってくれた鬼沢」の伝説によって、いまでも地域が一つにまとまる鬼沢といったイメージを昨日の鬼沢のねぶたと重ねています。



鬼神社鳥居



鬼伝説の里 「鬼 沢」の集落 弘前市鬼沢



鬼神社社殿



【鬼神社 社殿正面に掲げられた農機具の献額】

鬼を祭る鬼神社の本殿の軒下には本殿正面も含め、ぐるりと幾つもの鉄製の農機具が献額として奉納されていました。

鉄の農機具を使って一夜にして、堰をきす[°]いて村の人たちを救った鬼の伝説からすれば、鉄の農機具は鬼つまり、産鉄の民の象徴といえます。

また「たたら[°]の民」と農民との深い結びつきを現わしているとも言えると考えます。

赤坂憲雄氏編集の「東北学 vol. 2」には内藤正敏氏の「赤倉山の鬼神 津軽・鬼神社民俗誌」が収められ、鬼神社や巖鬼山神社などに伝わる貴重な民俗を整理している。

鬼神社では、鉄製の古い農機具がご神体として奉られている事や古くからの神事と鬼伝説との関係やこの地帯の製鉄と鬼や鬼伝説との関わり等が整理されている。

鬼神社の神事の中で、この農機具が吉凶を占うきわめて重要な役割を果たしている事がしめされており、長年にわたり、多くの農機具が献額として奉納されるのもうなずれる。



【鬼神社の神事 & 獅子舞】赤坂憲雄編「東北学 2」より

津軽岩木山北山麓の古代製鉄の地を歩いてみて、もっと山奥まで立ち入り、もっと暗いイメージがついてまわると想像していたが、「鬼沢ねぷた」といい、鬼神社と鬼沢の集落といい、十腰内から鱒ヶ沢に連なる製鉄の村村いずれも想像とは別の明るいものでした。案内してくれたタクシー運転手氏いわく「良い鬼の伝説の地」が象徴的でした。

2000. 8. 4, M. Nakanishi 訪問記

「弘前ねぷた」と岩木山北山麓「鬼伝説の里」

「鬼沢・鬼神社」・「十腰内・巖鬼神社」

〔完〕